

第106回 三方限古典塾（'15, 8, 20）

洪 自誠（1561～1616）「菜根譚」（その3-23）

1 山林の楽しみを譚る者は未だ必ずしも真に山林の趣を得るにはあらず。名利の譚を厭う者は、未だ必ずしも尽く名利の情を忘るるにはあらず。 後集1

（意識） 世俗を離れた自然の中の楽しみをことさらに吹聴する者は、まだ必ずしもほんとうにその閑居した生活の風流な趣を会得してはいない。

また、名誉や利欲の話をしたり、聞いたりすることをことさらに嫌う者は、まだ必ずしも名誉や利益を求める心を捨て去ってはいない。

（余説）何かと自己顕示欲を露わに見せる場面をよく目にする昨今です。「味噌の味噌臭きは上味噌にあらず。悟りの悟り臭きは上悟りにあらず」といいます。自我の塊は、一番始末に負えません。これはいろいろな面に応用できます。「教師の教師臭きは……」「坊主の坊主臭きは……」「学者の学者臭きは……」などなどです。立川談志が「正義をふりかざす奴ほど、たちが悪い奴はいない」も言っていました。同感です。

生と死、苦と楽、是と非、善と悪、自と他などの対立概念を捨て去ってしまうことを、禪では「放下著」と言っていて重要視し、逸話が数多くありますが同じようなことでしょう。

西郷隆盛の有名な言葉「金もいらぬ、命もいらぬ、名誉もいらぬ人が一番扱いにくい」は、この「放下著」を体得した人、自分を捨ててくることのできる人のことを言っているのだらうと思います。

2 水に釣るは逸事なるも、尚お、生殺の柄を持す。奕棋は清戯なるも、且つ戦争の心を動かす。見るべし、事を喜ぶは事を省くの適為るに如かず。多能は無能の真を全くするに若かざるを。 後集2

（意識） 釣りは浮世離れした風流な遊びである。しかし、そのなかには魚を生かしても殺しもある心を隠しているのである。囲碁は世事に関わらない高尚な遊び事のように見える。しかし、そのなかにも勝負にこだわる争い戦う心が動いている。

これで明らかなように、何か物事をなして喜ぶことは、何もせずに悠々自適してことには及ばない、多くの能力を持つことは、何の能力も持たないことで人間の本来の姿を全うすることには及ばないことを見極めるべきである。

（余説） 私の趣味は、釣り歴20年、囲碁歴50年だけに、この箴言はよくわかります。助けた亀に連れられて、竜宮城に招かれ、乙姫様に歓待を受け、タイやヒラメの舞い踊りを見た浦島太郎も、その生業はタイやヒラメを獲って殺すことだったはずで。

囲碁の用語には「陣を築く・陣を崩す・攻める・守る・切る・殺す・死ぬ・逃げる・生きる」などがあり、風流な趣味にしてはなかなか物騒です。

前半の趣旨と後半との関連がやや難解ですが、「無能の真を全くする」については、なんら能力、才能を有しないことが生まれ持つ性を全うすることになるという、老子の「無為自然」や荘子の「無用の用」に通ずるものだと思います。

（参考）中国古諺「1時間、幸せになりたかったら○を飲みなさい。3日間、幸せになりたかったら○○しなさい。8日間、幸せになりたかったら○を殺して食べなさい。永遠に、幸せになりたかったら○○を覚えなさい。」 ○に何を入れますか？（答えは次頁最後）

3 鶯^{おうかしげ}花^{はな}茂^{さか}くして山^{こま}濃^{えん}やかに谷^{えん}艶^{えん}なるは、総て是^{けんこん}れ乾坤^{けんこん}の幻境^{げんこん}なり。水^{みづ}木^き落^{おち}ちて石^{いし}瘦^やせ
峴^{がけ}枯^{かわ}れて、纒^{むすか}に天地^{しんご}の真^ま吾^ごを見る。 後集3

(意識) 鶯^{うぐいす}が美しい声^{こゑ}で鳴^なき、花^{はな}が咲^さき乱^{みだ}れ、山^{やま}も谷^やもあでやかな美^{うつく}しい春^{はる}の姿^{すがた}は、
すべて天地^{てんち}の仮^{まぼろし}の幻^{まぼろし}の姿^{すがた}であって、ほんとうの美^{うつく}しさではない。

谷^や川^{がわ}の水^{みづ}も枯^{かわ}れ、木^き立^たの紅^{べに}葉^はも落^{おち}ち着^きくし、石^{いし}の苔^{こけ}は消^きえ、崖^{がき}の木^き々^々も枯^{かわ}れた晩^{ばん}秋^{しゅう}
の姿^{すがた}にこそ、すべての虚^{うそ}飾^{かざり}を去^いった天地^{てんち}の真^ま実^{じつ}の姿^{すがた}を見^みることができ^きる。

(余説) 古^こ来^{らい}、和^わ歌^かや俳^{はい}句^く、水^{すい}墨^{ぼく}画^がや盆^{ぼん}栽^{ざい}などでは、「俗^{ぞく}気^きがなくさっぱりして中^{ちゆう}に
深^{ふか}い趣^{すゐ}がある」とされま^す。世^よ俗^{ぞく}の空^{くう}しさを説^{せつ}いてい^るのは、現^{げん}象^{じやう}界^{かい}にある物^{ぶつ}質^{しつ}的^{てき}存^{ぞん}在^{ざい}に
は固^こ定^{てい}的^{てき}実^{じつ}体^{たい}はな^く、空^{くう}であるとする、般^{はん}若^{にやく}心^{しん}経^{ぎやう}の「色^{しき}即^{じき}是^ぜ空^{くう}」の境^{きやう}地^ぢに近^{ちか}いもの^もです。

乾^{けん}坤^{こん}は、儒^{にゆ}家^か経^{けい}典^{てん}五^ご経^{けい}の一^{いつ}つ、易^い経^{けい}からきてい^ます。も^とは占^{せん}い^の書^{しよ}です^が、安^あ岡^{おか}正^{せい}篤^{とく}
は易^いと人^{にん}生^{じやう}哲^{てつ}学^{がく} (竹^{たけ}井^い出^{しゅつ}版^{ばん}) に「易^いは千^{せん}古^こ不^ふ変^{へん}の思^し想^{じやう}学^{がく}問^{もん}である」と書^かいてい^ます。

易^い経^{けい}では、この世^よを構^{くわ}成^{せい}する「気^き」には、陰^{いん}と陽^{やう}の二^につが^あり、それ^が組^ぐみ合^あわさ^つて
天^{てん}地^ち万^ま物^{ぶつ}を構^{くわ}成^{せい}し、宇^う宙^{ちゆう}の現^{げん}象^{じやう}を引^ひき起^{おこ}すとされ^てい^ます。陽^{やう}文^{ぶん}と陰^{いん}文^{ぶん}三^{さん}つ^の組^ぐみ合^あわ
せ^で八^{はつ}卦^けとな^りま^す。陽^{やう}文^{ぶん}三^{さん}つ^が乾^{けん}の卦^けで天^{てん}とし、陰^{いん}文^{ぶん}三^{さん}つ^が坤^{こん}で地^ちとな^りま^す。

そ^こで「乾^{けん}坤^{こん}」は、世^よ界^{かい}全^{ぜん}体^{たい}を象^{さう}徴^{てい}する語^ごとな^り、天^{てん}地^ちをか^けた大^{だい}勝^{しょう}負^ふを「乾^{けん}坤^{こん}一^{いつ}擲^{てき}」
と^もい^ます。大^{だい}韓^{かん}民^{みん}国^{こく} (韓^{かん}国^{こく}) の国^{こく}旗^き・太^{たい}極^{ごく}旗^きは、中^{ちゆう}央^{やう}の円^{えん}は宇^う宙^{ちゆう}の本^{ほん}体^{たい}である太^{たい}極^{ごく}と
陰^{いん}・陽^{やう}二^に気^きを、四^しつ^の卦^けは天^{てん}・地^ち・水^{すい}・火^かなど^を表^{あらわ}して^いる^そう^です。

(参考) 藤^{とう}原^{げん}定^{てい}家^か「見^み渡^わせば 花^{はな}ももみじも な^なかりけ^り 浦^{うら}の苦^く屋^やの 秋^{あき}の夕^{ゆふ}暮^{くれ}れ」

4 歳^{まい}月^{げつ}は本^{もと}より長^{なが}し。而^しか^れれ^ども忙^{いそ}しき者^{もの}は自^{みづか}ら促^{せま}れり^とす。天^{てん}地^ちは本^{もと}より
寛^{ひろ}し。而^しか^れれ^ども鄙^{いや}しき者^{もの}は自^{みづか}ら隘^{せま}し^とす。風^{かぜ}花^{はな}雪^{ゆき}月^{つき}は本^{もと}より間^{かん}なり。而^しか^れれ^ども
勞^{ろう}攘^{じやう}の者^{もの}は自^{みづか}ら冗^{じゆう}なり^とす。 後集4

(意識) 歳^{まい}月^{げつ}はも^とも^と悠^{ゆう}長^{ちやう}な^もの^もで^ある。け^れれ^ども、気^きぜ^わし^い人^{にん}間^{かん}は、自^{みづか}ら^でせ^き立^た
て^て歳^{まい}月^{げつ}を短^{たん}く^して^いる。天^{てん}地^ちと^いう^もの^もはも^とも^と広^{ひろ}々^々と^した^もの^もで^ある。と^ころ^が、
度^ど量^{りやう}が小^{せう}さ^く見^{けん}識^しの低^{てい}い^人間^{かん}は、自^{みづか}ら^から^せの^{ちゆう}中^{ちゆう}を狭^{せま}い^もの^もに^して^いる。

夏^{なつ}の風^{かぜ}、春^{はる}の花^{はな}、冬^{ふゆ}の雪^{ゆき}、秋^{あき}の月^{つき}など四^し季^き折^せ々^々の風^{かぜ}情^{じやう}は、も^とも^との^どか^でゆ^った^りし
た^もの^もで^ある。け^れれ^ども、心^{こゝろ}が^あく^せく^して^自ら^辛苦^くする^人間^{かん}は、それ^を楽^{たの}し^むゆ^とり^が
な^く、それ^を自^{みづか}ら^でむ^だで^わず^らわ^しい^もの^もに^して^いる。

(余説) 「人^{にん}生^{じやう}は考^{こう}え^か方^{かた}次^じ第^{だい}で^ある。人^{にん}生^{じやう}の結^{けつ}果^{くわ}＝考^{こう}え^か方^{かた}×熱^{ねつ}意^い×能^{のう}力^{りき}」は、稻^い盛^{せい}和^わ夫^ふ氏^し
の言^{ごん}葉^{えつ}です。ま^た中^{ちゆう}村^{むら}天^{てん}風^{ふう}の「人^{にん}生^{じやう}は心^{こゝろ}一^{いつ}つ^の置^おき^どこ^ろ」も、私^{わたし}は日^{にっ}頃^{けい}か^ら大^{だい}切^{せつ}に^して
い^ます。そ^の時^{とき}の心^{こゝろ}の状^{じやう}態^{たい}が、成^{せい}功^{こう}を^しみ、ま^た失^{しつ}敗^{ぱい}に^おい^やる^こと^にな^りま^す。

具^ぐ体^{たい}的^{てき}に^は、事^{こと}あ^る時^{とき}も事^{こと}な^き時^{とき}も、常^{じやう}に^その^{こゝろ}心^{こゝろ}が泰^{たい}然^{ぜん}不^ふ動^{どう}の状^{じやう}態^{たい}で^あると^か、常^{じやう}に^{こゝろ}心^{こゝろ}
の平^{へい}安^{あん}を^{たも}と^と保^{たも}つ^とると^か、清^{せい}濁^{たく}併^{へい}せ^せ呑^{とん}む^む寛^{かん}容^{りやう}さ^とか、積^{せき}極^{ごく}的^{てき}と^かで^しょう^か。

(参考) 山^{やま}岡^{おか}鉄^{てつ}舟^{ふね}「晴^はれ^てよ^し 曇^曇り^{ても}よ^し 富^ふ士^しの山^{やま} も^との姿^{すがた}は 変^へわ^らざ^りけ^り」

(剣^{けん}豪^{ごう}、幕^{まく}臣^{しん}、駿^{しゆん}府^ふで^の西^{せい}郷^{きやう}と^の単^{たん}独^{どく}会^{かい}見^{けん}、明^{めい}治^ち政^{せい}府^ふ高^{こう}官^{くわん} 1836~1888)

ア^レン「自^{みづか}ら^の思^しい^が人^{にん}生^{じやう}を^{くわ}創^{そう}る」「良^{りやう}い^い思^しい^が良^{りやう}い^い実^{じつ}を^{むす}ぶ」(イ^いギ^ぎリス^の法^{ほふ}学^{がく}者^{しや})

【2の答^{こたへ}は「酒^{しゆ}・結^{けつ}婚^{こん}・豚^{とん}・釣^{てう}り」で^した。】